

四年に一度のスポーツの祭典「ロンドンオリンピック」が閉幕しました。日本は史上最多となる三十八個のメダルを獲得し、八月二十日には東京・銀座でパレードが行なわれ、五十万人もの人が駆けつけました。各アスリートが名勝負を繰り広げた中で大きな注目を集めたものの一つはサッカーではなかったでしょうか。女子は初の決勝進出で銀メダル。男子は韓国に敗れ、惜しくもメダルは逸しましたが、その活躍ぶりには目を見張るものがありました。

その日本サッカーの基礎を築いたのは、「日本サッカーの父」と呼ばれるデットマー・クラマー氏（ドイツ・ドルトムント出身）です。氏は、一九六〇年、東京オリンピックを控えた日本代表を指導するためコーチとして招かれました。自ら手本となるプレーを見せ、初歩的な練習を繰り返しました。当時の教え子には釜本邦茂氏、杉山隆一氏などがいます。そして一九六四年の東京オリンピックでは見事ベスト8進出次のメキシコオリンピックでは銅メダル獲得の快挙を成し遂げたのでした。

氏はサッカーの指導と併せて「言葉の魔術師」とも呼ばれ、数々の名言を残しています。その一つに次の言葉があります。「タイムアップの笛は、次の試合へのキックオフの笛である」

事を終えると「やれやれ、やっと終わった」と急に気を抜いたり、物事が成功に終わるといつまでもいい気になってしまいがちで



新年度にあたり 創生の基盤を築く

す。しかし事が終わった時にはもうすでに次が始まっているのだと気を引き締め、準備や調査を着実に進めることが大事だということをお教えしてくれています。

倫理法人会は平成二十四年度が終わり、新たな年度に突入しましたが、一年間の計画を綿密に立てることはできたでしょうか。心のどこかに「これからの一年、まだまだたっぷりと時間はある。その時になって考えればいい」「あわてなくても大丈夫、大丈夫」というような、どこか気の抜けたような部分があるとすれば、直ちに気持ちを切り換えねばなりません。

倫理法人会の目指すところは、人間の生活法則である「純粹倫理」を実践し、普及することによって、「日本創生」の基盤を築くことにあります。あらゆる領域で「創生」が求められる今日、それは大変に困難な道程ではありますが、揺るぎない信念と誇りをもって一歩一歩前進していかなければなりません。岐路に立たされた今の日本で、立ち止まっている余裕はありません。

自らが学び実践して得た体験の喜びを、また純粹倫理の実践の大切さや必要性を、「常に相手の幸せや繁栄を念じつつ、いつでも、どこでも、気軽に、誰にでも（経営者）の心構えで、広く伝えていこうではありませんか。必ずやこの熱き思いをしつかりと受け止めてくださる経営者がいらっしやることを念じつつ。

実りある一年としてまいりましょう。

絵・今谷 鉄柱